

第2章 文化的景観の概要

2-1 文化的景観の位置

岐阜市は、本州中部地方に広がる濃尾平野の北方に位置する。岐阜県の県庁所在地であり、人口約42万人が暮らす地方中核都市である。

長良川は、岐阜県北西部の白山山系周辺の山々を水源とし、岐阜県下の多くの支流を束ね、伊勢湾に注ぐ一級河川であり、その中流域において岐阜市の中央を北東から南西に貫流する。

岐阜市は、概ねその市域の全てが長良川流域であり、長良川に育まれながら歴史を重ね、文化を醸成してきた地域と言える。その市域にあつて、本保存計画の対象となる重要文化的景観の選定申出範囲は、調査範囲のほぼ中心部に位置する地域であり、長良川と直接的に関係しながら、「長良川流域文化」とも呼べる流域固有の歴史や文化を蓄積し、継承する地域である。

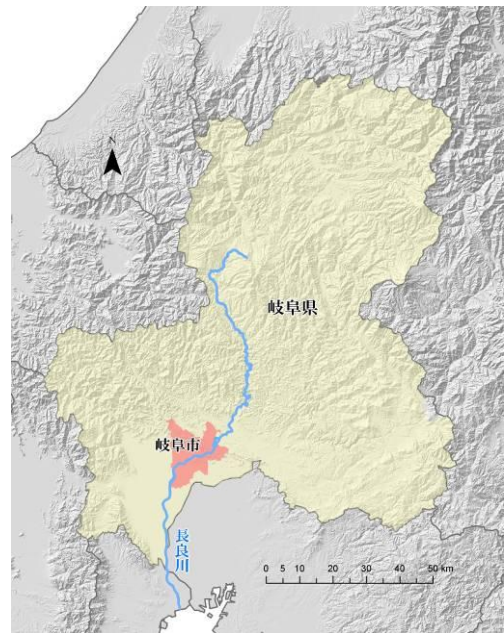


図 2-1 岐阜市及び長良川の位置

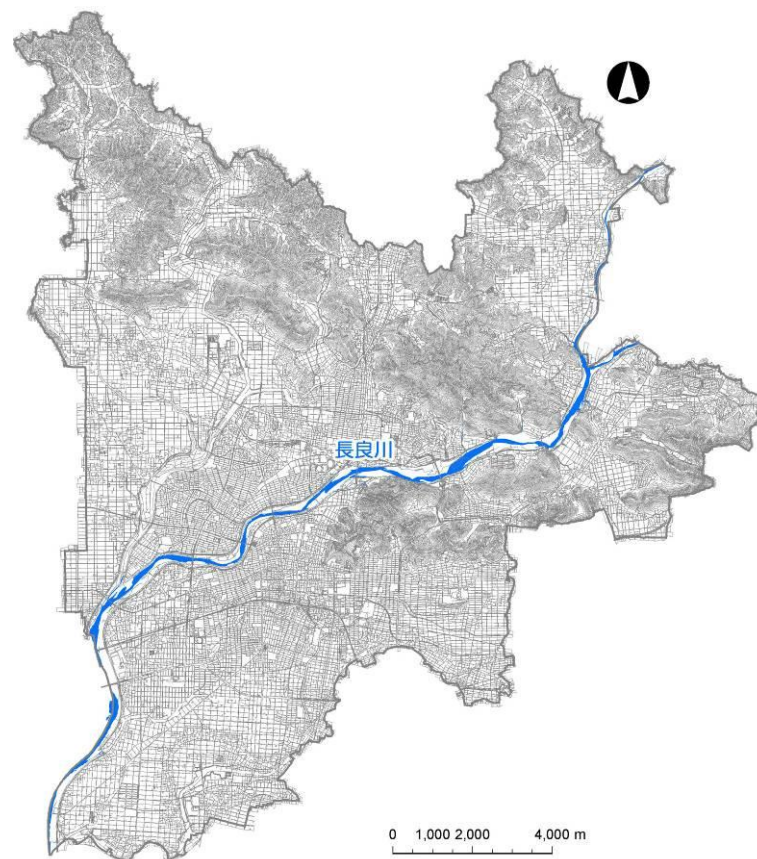


図 2-2 岐阜市における長良川の位置

2-2 文化的景観の価値

(1) 地理・歴史・文化の概要

地理

長良川は、我が国の中でも屈指の水量と水質を誇る清流河川である。岐阜県北西部の白山山系周辺の山々を水源とし、県下の多くの支流を束ねながら南流する。市域において、現在は1本の流れであるが、昭和初期までは、長良橋付近で3本に分流し、河渡橋付近で再び1本の流れになり伊勢湾に注いでいた。長良川扇状地は、美濃山地と濃尾平野の境界部分に位置する。木曾川流域の中でも河川の勾配は際立って緩いため流送土砂が少なく、形成される扇状地は飛騨川・木曾川・揖斐川のそれと比べて半径約4kmと小さい。

金華山は美濃山地の南西端に位置する。北側は長良川に接し、南側は大岩壁によって平野部に接して峻立する。下流の美濃山地の南部は、硬いチャート層による高い尾根と柔らかい砂岩層による低い山から成る。砂岩層の山が長良川に削られたことにより、チャート層の山が孤立するように残る。金華山はチャート層から成る山で、その形状により「高い山」という印象を受けるが、実際の標高は329mと決して高い山とは言えない。

岐阜市域は、長良川の中流域にあつて美濃山地と濃尾平野の境界部に位置する。当文化的景観の範囲に含まれる町は長良川扇状地に立地し、鶉飼屋地区と川原町地区は、長良川の堤外地に、旧城下町地区は金華山西麓に形成された町である。

歴史

長良川では古代より水運が行われ、地形的な結節点や支流の合流点等に川湊が開かれた。特に扇頂部の中河原湊（川原町地区）・長良湊（鶉飼屋地区）・鏡島湊（鏡島地区）は古くから舟運等の経済活動の拠点となっていた。中世末期には齋藤道三や織田信長等により、金華山山頂と山麓に城と居館が、その西側に城下町が形成され、政治的拠点としての要素が加えられた。

関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城は落城し、その後、近世において金華山は尾張藩により一般の入山が規制された。政治の拠点は加納城に移ったが、尾張藩は、旧岐阜城下町の水運の要所としての機能を活かし、中河原湊付近に長良川役所を設置した。こうして旧岐阜城下町は「岐阜町」と呼ばれる商業都市へと変貌した。近代になると、金華山山頂に岐阜城復興天守が、山麓城主居館跡地一帯には岐阜公園が造られ、市民に親しまれる空間として機能する。岐阜町の商業の中心地としての機能は昭和初期まで継続したが、鉄道の敷設を契機に材木商等は市の南部に移転した。現在では、多くの人々が住む住宅地へと変化し、かつての商業地としての機能は縮小しつつあるが、紙を中心とした問屋業もしくは和紙・竹を材料とする提灯・傘・団扇等の伝統的な手工業が営まれている。

文化（生活・生業）

長良川では、その地形的特性または水量と水質により、豊かな魚相が育まれた。流域の人々は鮎や鱒等の漁獲を求め、古くから夜川網、瀬張網等多種多様な漁法を展開し、現代まで継承している。中でも鶉飼漁は、中世末以降、権力の保護を受けながら現代まで継承され、「長良川の鶉飼」は日本で行われる鶉飼漁の代名詞となっている。

鶉飼観覧は近世には地域の人々の楽しみであった。明治時代以降は、長良遊船業組合の結成や

多くの旅館が建設されるなど、地域住民と鵜匠が連携し、鵜飼屋地区が鵜飼観覧を支える地域として発展していった。現代においては、観覧船の造船及び操船技術の中に伝統的な川文化が伝承されるとともに、鵜飼屋地区や川原町地区には鵜飼漁や鵜飼観覧に関わる旅館等の建造物、もしくは鵜飼観覧船造船所等の施設が、形を変えながらもその機能や位置を継承している。

長良川の水運は、城下町形成以後さらに盛行し、材木・和紙・糸等を扱う問屋業、美濃和紙と竹を用いる提灯・団扇・傘等の手工業が川原町や岐阜町で発達した。現在もそれらの生業を維持している町家形式の伝統的家屋が範囲内にあり、また提灯や団扇は岐阜市固有の伝統産業として継承されている。

以上のような地理の特性、歴史の重層性、そして文化の継続性の中で、長良川扇状地を中心とした地域において、「長良川を主軸とした流通往来の構造」、「金華山麓に栄えた都市」、「長良川鵜飼を支える諸空間」という3つの構造を持つ文化的景観が形成された。

以下では、それぞれの構造について詳述する。

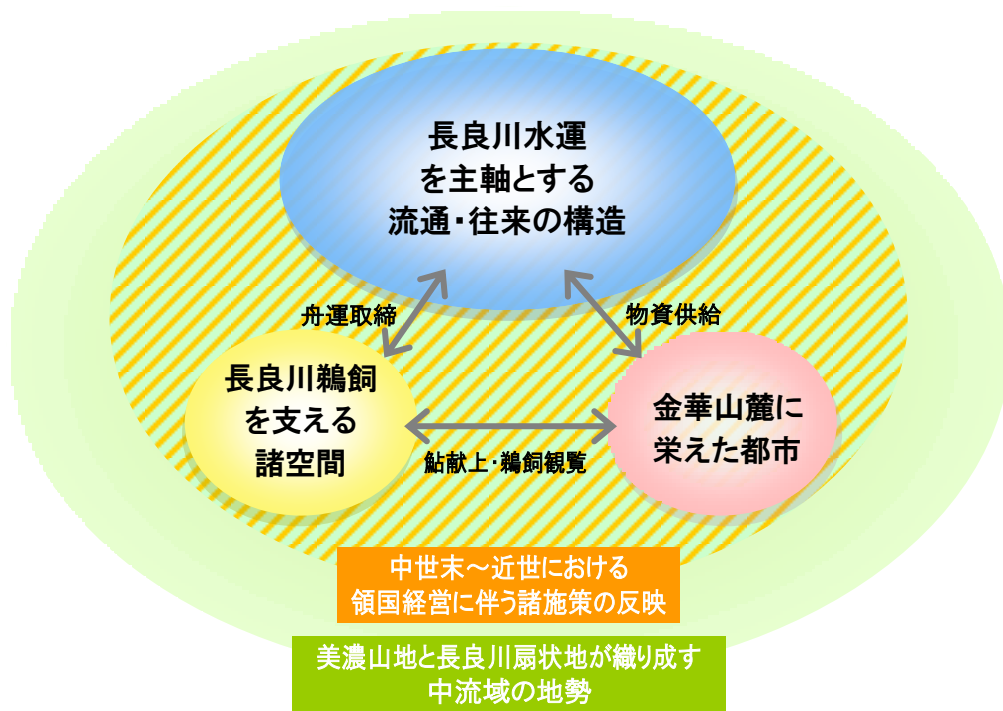


図 2-3 長良川中流域における岐阜の文化的景観の構造イメージ図

(2) 文化的景観の構造

長良川を主軸とした流通・往来の構造 (図 2-4)

岐阜市域における長良川には、芥見湊・中河原湊・長良湊・鏡島湊等が存在した。これら川湊は水運と陸運の結節点であり、川湊には京街道・高富街道・郡上街道等の諸街道が繋がっていた。

川湊のうち、特に中河原湊と鏡島湊は、水運の難所であった長良川扇状地において比較的流路が安定した扇頂部と扇端部に置かれた。両湊は、この間において長良川が少なくとも3本に分流していたことから、長良川水運を掌握する上での重要な湊地であった。扇頂部の中河原湊には近世尾張藩の川役所が置かれ、対岸の鶺鴒屋に居住する鶺匠に抜け荷の取締りを行わせるなどして、長良川上流からの流通を掌握した。また、中河原湊は、北方の山県郡や越前国を繋ぐ高富街道の渡河点であり、岐阜町の飛騨や美濃北方からの流通・往来の窓口となった。一方扇端部の鏡島湊は、古くから京に繋がる京街道の渡河点であり、中世末から近世には、加納藩の外湊として位置づけられるとともに、下流方面の物資が京街道を經由して岐阜町にも送られた。

このように川湊や街道の基点には、岐阜町・川原町・鏡島等の町場や集落が成立し、長良川中流域に広く流通・往来のネットワークが形成されていった。中でも都市・岐阜町には、東西南北の周辺地域や諸国へと至る主要街道の基点が重なり、全国各地の物資が集積・流通する一大拠点として、長良川流域全体の地域経済を牽引した。

昭和時代に至り、流通・往来の主役は水運から陸上交通に転換した。湊は姿を消し、渡しについても「お紅の渡し」以外は橋梁に変えられた。しかし、長良川水運を主軸として発達した都市や集落、街道等からなる地域構造は今日も継承され、当文化的景観の基本構造を規定している。

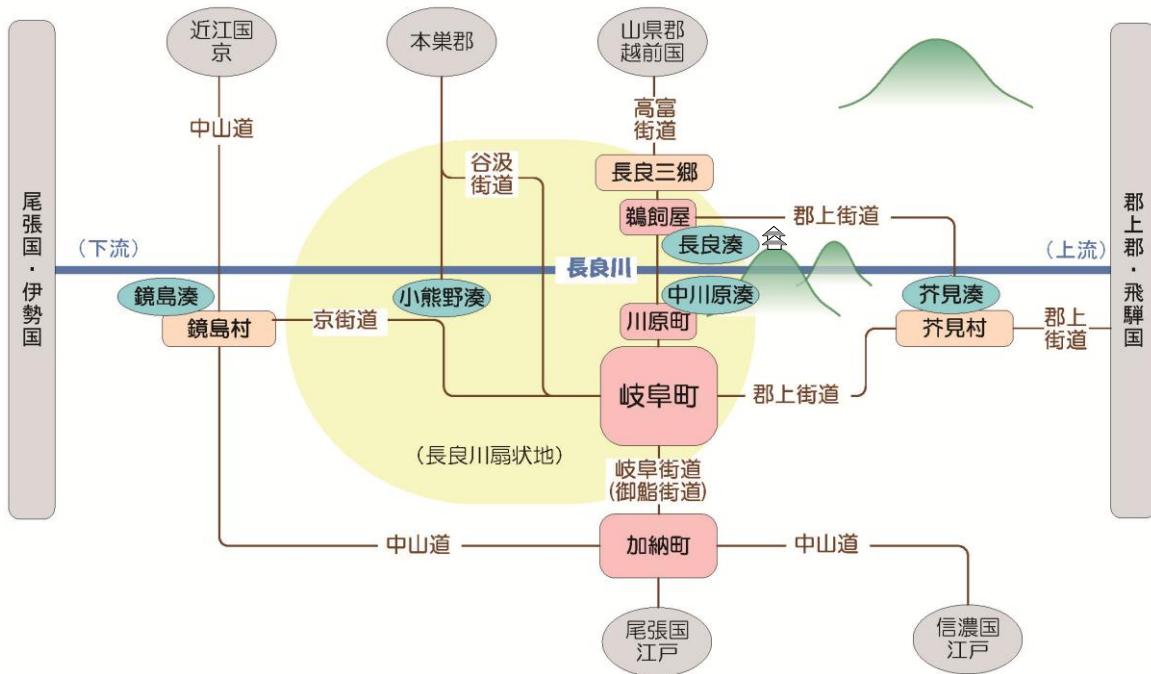


図 2-4 近世から近代における長良川流域の流通・往来の構造模式図

金華山麓に栄えた都市（図 2-7）

美濃山地の西端に位置して濃尾平野に聳え立つ金華山は、平野との比高差 300m以上に及び、近接する長良川が北側の堀として機能する防衛に適した天然の要害であった。加えて、金華山西麓の中河原湊付近は、もともと長良川扇状地の扇頂部に位置する水運と陸運の結節点として、経済活動への利点を備えていた。中世末期、斎藤道三や織田信長は、長良川を主軸とした流通・往來の構造の中心となる川湊に隣接し、かつ防衛機能に優れた金華山とその山麓に着目し、美濃国における政治と経済活動の一元化を図り、領国経営の拠点として城と都市を形成し、体制を整えたのである。

町場における道路について、岐阜城下町が形成される以前は、長良川へのアクセスを主眼に置いた、今町筋・材木町筋等の南北方向の道路網が主であったと考えられる。中世末期、岐阜城下町が形成される段階では、七曲通り・百曲通り・新町通り等の金華山へ向かう東西方向の道路網が整備された。斎藤道三や織田信長は、城下町内に武家地、寺社地、町人地等を配置し、それらを一体的に堀と土居で囲むという、総構えを備えた原初的な都市づくりを行った。また、総構えの土塁は、長良川の洪水から城下町を守る堤防としての機能も有し、生活空間としての安定性をもたらした。

近世に至り、岐阜城は関ヶ原合戦の前哨戦により落城した。以後、金華山には、尾張藩による入山規制によって地域固有の良好な自然環境が形成されるとともに、岐阜城跡や信長公居館跡としての地形や遺構が良好に保存された。また、旧岐阜城下町は川湊や街道からもたらされる各地の物資が集積・流通することから、尾張藩は、中河原湊付近に長良川役所を設置し、商業地としての機能を存続させた。こうして旧岐阜城下町は地域の経済を牽引する商業都市「岐阜町」へと変貌し、発展し続けた。

岐阜は、材木や竹、美濃和紙等が産出される美濃山地に近いという地理的な利点から、岐阜町には、材木・和紙・糸等をはじめ様々なものを扱う問屋業が発達した。提灯・団扇・傘等の伝統産業について、竹および和紙を利用する提灯は、材料の和紙はもちろんのこと、骨の原料となる竹についても、当初は美濃産を使用するなど、長良川を介した物資集散地としての地の利を生かし発達した。そのような生業を支えた町家について、主屋は道路に接し、「うなぎの寝床」状の敷地の奥には土蔵を配置するのが一般的であった。蔵は、家財のための蔵のほか、生業に関わる蔵（木蔵、紙蔵等）もあることから、主屋内に設けられた広めの土間は、ミセと蔵の間での物資の頻繁な運搬に利用された。

近代に至り、金華山は入山規制が解かれ、御料林（戦後は国有林）として管理される。また、山麓において明治初期には岐阜公園、大正時代には三重塔が造られ、山上には明治末期に岐阜城復興天守が造られる。このように、金華山は自然と歴史を一体的に体感できる憩いの空間と認識し利用されるようになる。さらに、岐阜町に住む人々が、金華山もしくは岐阜城復興天守が見える位置に本座敷や茶室を置くなど、眺望を楽しむ山として再認識された。

金華山は上述のような管理の歴史を経て、現代においても豊かな植生と生態系が維持されているため、多くの利用者に親しまれている。また、今日の金華地区には、城下町に由来する総構えの土塁、水路、街路、町割り等多様な要素が残存し、基本的な骨格として今日まで深く土地利用に影響を与えている（図 2-5, 6）。中世末期以前－中世末期－近世－近代という時間の流れの中で、人々の生活・生業や意識において、長良川と金華山という主軸が交互になるということも、金華

地区の都市形成を考える上で興味深い点である。また、遅くとも近世までには、両側町の形態をとる町割りが形成され、それを基盤とした自治組織がつくられ、自治活動が行われたと考えられる。さらに住民は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗うため、白木の格子の町並みという独特の景観が生み出された。以上のような住民による無形の活動は、現在まで確実に継承されている。



図 2-5 『濃州厚見郡岐阜図』(承応 3(1654)年)(名古屋市蓬左文庫所蔵)に描かれた道路・土塁・堀

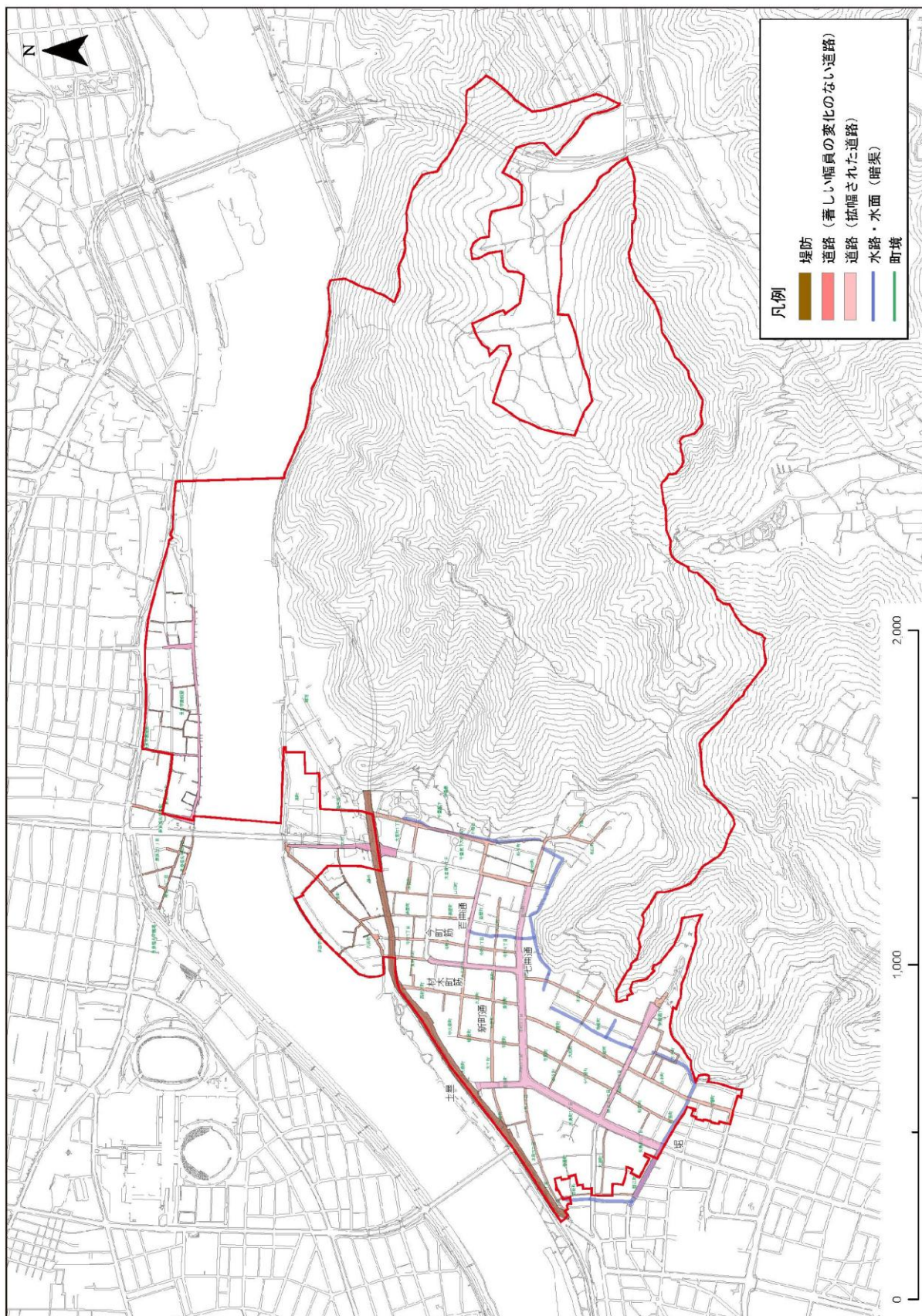


図 2-6 現在に継承されている道路・水路・町割り

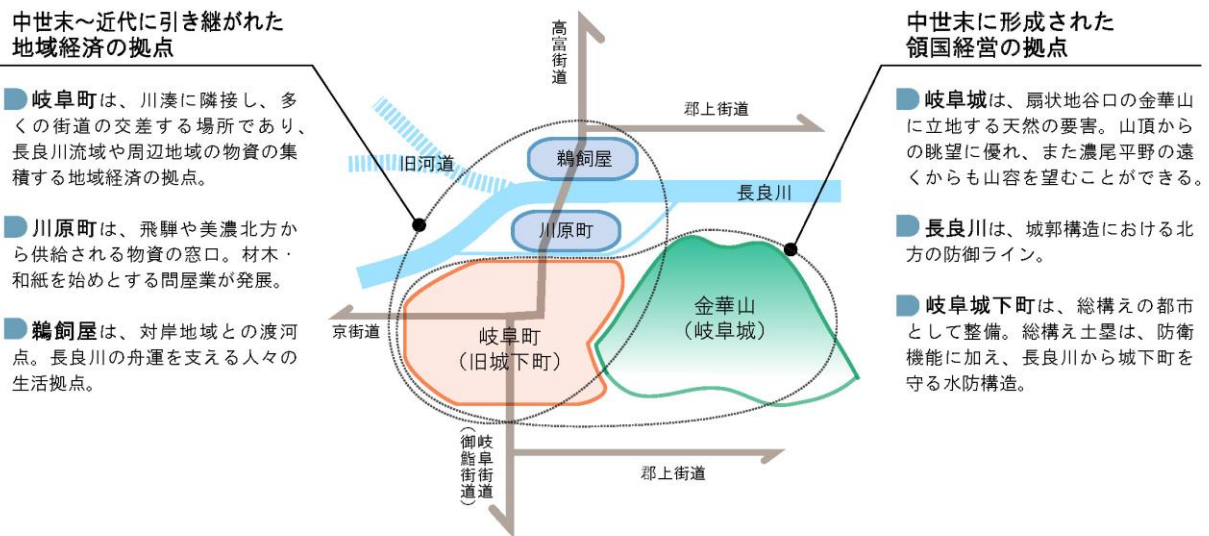


図 2-7 金華山周辺における領国経営と地域経済の拠点としての構造模式図

長良川鵜飼を支える諸空間（図 2-8）

水量と水質に恵まれた長良川は、現在でも多様な魚類の宝庫であり、特にアユの生息に適し、岐阜市民の生活や生業に欠くことのできない河川である。長良川の豊かな漁業資源は、夜川網や瀬張り網等多様な漁撈技術を育み、鵜飼のみならず、その多くは今日もなお継承されるとともに、地域の食文化を形成してきた。

鵜飼は美濃国において1300年来行われてきた漁法である。鵜飼は、中世末頃から鑑賞及び献上鮎鮓の対象として為政者の保護を受け、その高度な技術や伝統的な習俗と同時に、鵜飼を支え、鵜飼に支えられた地域の歴史や文化をも継承する。

長良川鵜飼は、遅くとも中世末頃からは小瀬鵜飼と長良鵜飼の2つのグループがあり、上流側を小瀬鵜飼、下流側を長良鵜飼の漁場に分け、長良の鵜飼集団は、川湊でもあった鵜飼屋に居住した。近世には、幕府や尾張藩の庇護を受けた長良川鵜飼の「献上鮎鮓」を支える仕組みが岐阜町をはじめとする地域に構築された。明治時代には宮内省への鮎献上が始まるとともに、鵜匠家が鮎鮓を製造するようになる。以上のような鵜飼漁の権力による保護は、結果的に周辺の山や川の環境や景観を維持させ、多様な伝統的漁業の継承にも寄与している。

近世には長良川や旧岐阜町が尾張藩支配となり、献上鮎鮓製造や生鮎御用のための役鮎が課された。献上鮎鮓は、岐阜町に置かれた御鮎所（正法寺（岐阜大仏）の西側付近）で製造され、岐阜街道（御鮎街道）を經由して江戸へ陸送された。公儀の御用を預かる長良川鵜飼は、幕府や尾張藩により優遇・保護され、長良川において特権的な地位を確立し、近代以降は、宮内庁式部職として、鮎の献上の伝統を継承している。昭和40年代からは、大縄場大橋の下流等、鮎の主要な産卵場の保護をはじめとする漁業資源の保護が行われ、長良川鵜飼は、多様な漁撈技術の中にあって特別な地位を保ち続け、長良川における漁撈文化の象徴にもなっている。

また鵜飼観覧は中世以来の歴史を持つ。金華山をはじめとする美濃山地の山々は、近世以降、漁場の借景として認知され、多くの絵図に描かれている。鵜飼観覧は、近代以降に船頭や旅館業者をはじめとする多くの地域住民が携わる重要な観光事業として発展するとともに、長良川特有

の観覧船造船技術や操船技術の中に伝統的な川文化が伝承された。鵜匠の居住地である鵜飼屋と鵜飼観覧に関係する施設が集中する川原町は、長良川を挟んでひとまとまりの観光拠点として機能している。これらの集落は、長良川および周囲の山々からなる優れた自然景勝地と一体となつて、現在の長良川鵜飼を支えている。

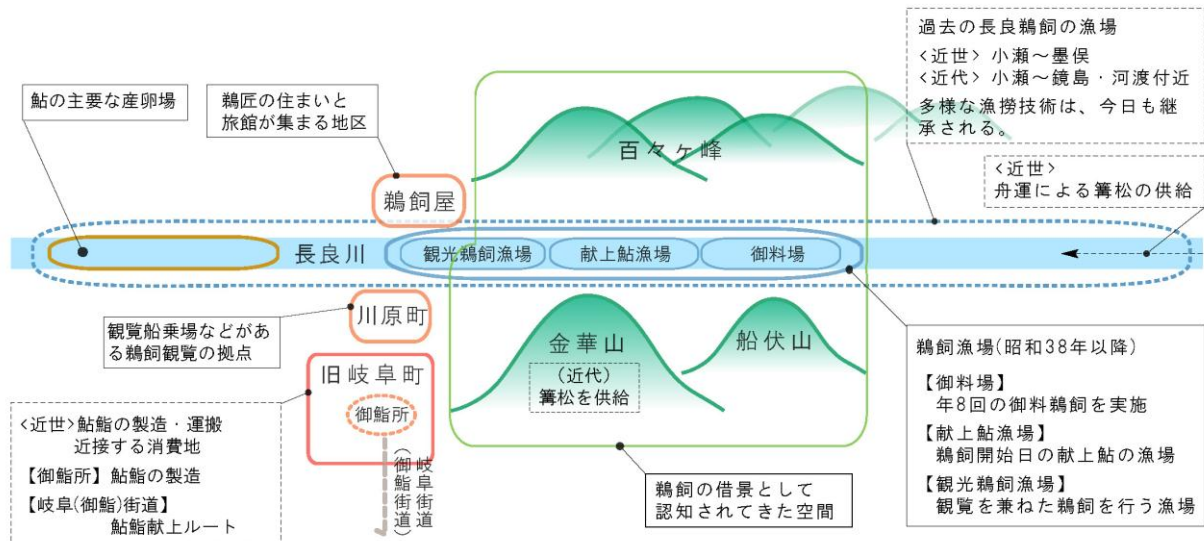


図2-8 長良川鵜飼を支える諸空間の配置模式図

(3) 「長良川中流域における岐阜の文化的景観」の普遍的な価値

岐阜市の中央部には、多様な生態系や植生を維持する長良川・金華山があり、またそれらの周囲に展開する都市部には、斎藤道三や織田信長によって形成された岐阜城下町の基盤が、ほぼ形を変えずに継承されている。

長良川の水運や都市の基盤の中で、材木・和紙・糸等の問屋業、竹・和を材料とする提灯・傘・団扇等の伝統的な手工業は昭和初期まで発展し続けた。以後、長良川の水運はなくなり、また、現在は商業地としての機能は縮小傾向にあるが、紙の問屋業や団扇等の伝統的な手工業は今もなお営まれている。さらに、遅くとも江戸時代までには形成された自治組織及び自治活動が、両側町の形態をとる町の中で現在も継承されている。

また長良川では、鵜飼漁をはじめとした様々な伝統漁法が現在も行われている。鵜飼に携わる6名の鵜匠が暮らし、「観覧鵜飼」により発展した旅館等の観光施設が建ち並ぶ鵜飼屋地区、および長良川の水運により発展した川原町地区は、長良川の恵みに依拠する生業・生活によって形成された堤外地の集落であり、人々と長良川との距離の近さをよく示している。

長良川の堤外地の集落及び中世から近世に整備された都市構造が残存する都市部において、現代の人々は、長良川や金華山と一体となり、また常にそれらを意識しながら、問屋業、伝統的手工業、自治活動及び祭りといった生業・生活を継承していることこそが、当文化的景観の価値である。

2-3 文化的景観の範囲

市全域が概ね長良川流域に含まれる岐阜市にあって、「2-2 文化的景観の価値」に示した普遍的価値を有する地区として、表 2-1 に示す①～⑦が挙げられる。そのことから当文化的景観の範囲は、①～⑦の地区の総体とする（図 2-9 参照）。

表 2-1 文化的景観の構造を構成する区域の概説と地区区分

文化的景観の構造を構成する地区	地区の名称	地区の概説
①長良川のうち、美濃山地を貫き、長良川扇状地上を流下する区間	長良川地区	流通往来の結節点であった川湊が置かれるとともに、長良川鶴飼を支える諸機能が配され、昭和初期から風致地区として保全が図られてきた藍川橋～河渡橋までの河川の区間。
②長良川に近接する美濃山地	山地地区	絵図等に描かれる等、古くから長良川鶴飼の借景として認知され、昭和初期から長良川とともに風致地区として保全が図られてきた地区。
③長良川堤外地の市街地	川原町地区	長良川水運を主軸とする流通・往来において川湊や渡河点として利用された堤外地としての立地とともに、往時の繁栄を伝える町並みを継承する地区。
	鶴飼屋地区	川湊や渡河点としての機能を持つ堤外地の立地とともに、鶴匠の居住地として継承される地区。
④金華山とその山麓に形成された旧城下町の市街地	金華山地区	斎藤道三・織田信長等の戦国武将が居城とした史跡岐阜城跡の範囲。
	旧城下町地区	金華山西麓の城下町としての総構えの都市構造と、長良川を主軸とする流通・往来の経済拠点としての繁栄を物語る問屋業を支えた建造物、提灯・和傘・団扇などの伝統産業の構造が継承される地区。
⑤長良川の川湊に繋がる旧街道を継承する道	旧街道地区	長良川の川湊や旧岐阜町と繋がり、流通・往来のネットワークを形成した高富街道、岐阜街道（御鯨街道）、郡上街道、谷汲街道、京街道等の街道。
⑥渡船場と一体的に継承される界限	乙津寺周辺地区	渡船場として市域に唯一現存する小紅の渡しと一体的に継承される乙津寺周辺の地区。
⑦長良川と美濃山地に挟まれた集落	周辺集落地区	美濃山地とともに、長良川鶴飼の背景となり、畑作地や果樹園としての土地利用を継承してきた河畔の集落（雄総集落、志段見集落、古津集落、日野集落）。

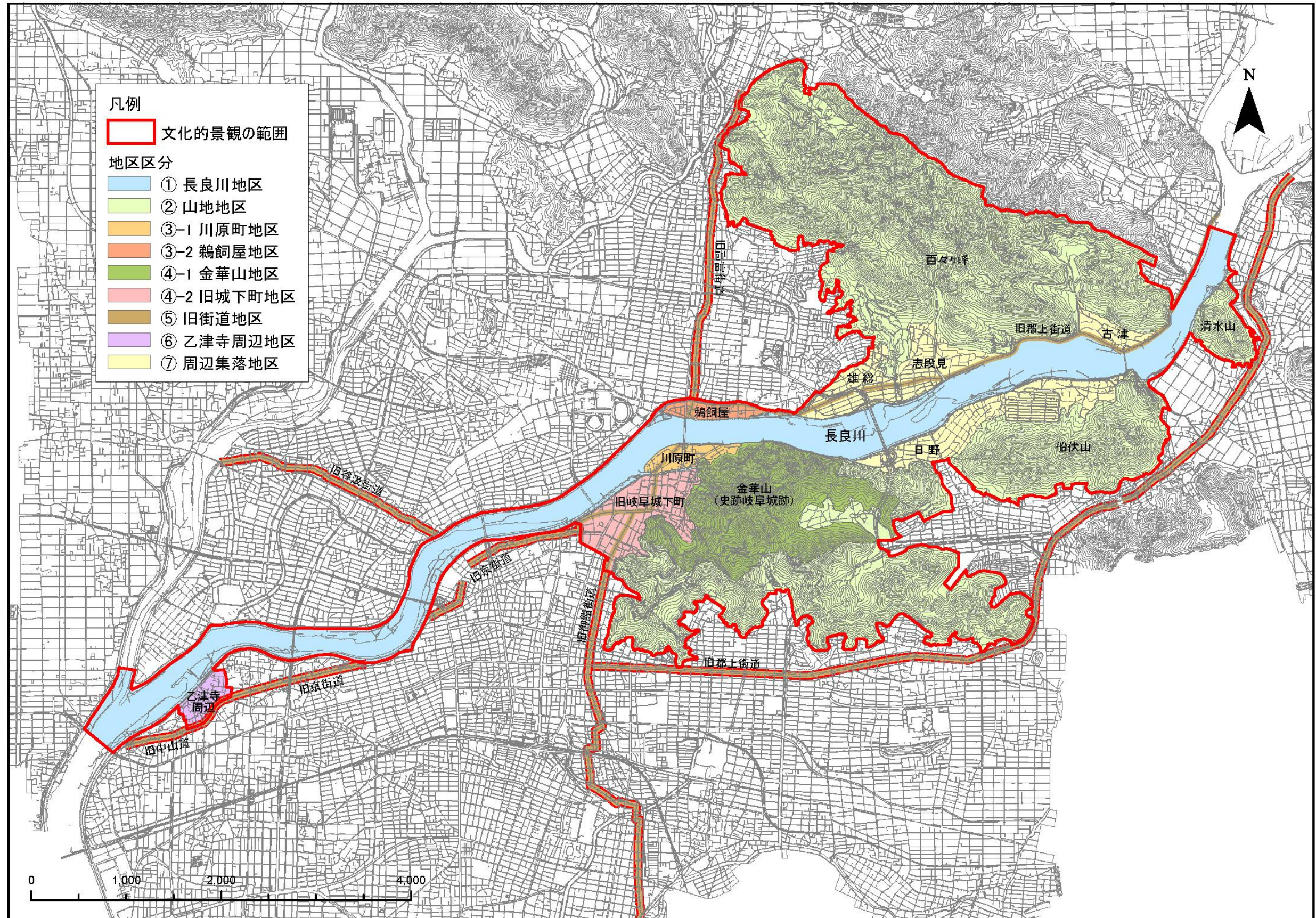


図 2-9 文化的景観の範囲と地区区分

2-4 選定申出の進め方

当文化的景観は、総面積 2,356.7ha と広域にわたるため、今後、段階的に選定申出の手続きを進める予定としている。

岐阜市では、平成 22 年 1 月に施行し平成 24 年に変更した「岐阜市景観計画」において、市全域を景観計画区域と定め、さらに重点的に景観形成を図る区域として景観計画重要区域を定めている（景観計画の詳細は「5-2 岐阜市景観計画の概要」参照）。

重要文化的景観の選定申出範囲における各地区と景観計画重要区域との対応関係を表 2-2 に示した。文化的景観における長良川地区、金華山地区及び鶺鴒屋地区は景観計画重要区域の「金華山・長良川区域」に、旧城下町地区と川原町地区は景観計画重要区域の「金華区域」にそれぞれ対応している。また、平成 25 年 7 月の第 1 次選定申出は、この 2 つの景観計画重要区域に概ね該当する範囲とした（図 2-10、2-11 参照）。

その他の文化的景観の範囲における重要文化的景観への選定申出についても、平成 26 年度以降に、詳細な範囲を検討し決定するとともに、地権者の同意等申出に必要な手続きを進め、準備が整い次第、順次選定申出を行うこととする。

表 2-2 重要文化的景観への選定申出の予定

順次	申出予定年月	主な地区名	面積 (ha)	景観計画の位置づけ
第 1 次	平成 25 年 7 月	長良川地区 (一部) 金華山地区 鶺鴒屋地区 (一部) 川原町地区 (一部) 旧城下町地区 (一部)	331.9ha	景観計画重要区域「金華山・長良川区域」、「金華区域」に設定済み。
第 2 次以降	平成 26 年度以降	長良川地区 (一部) 鶺鴒屋地区 (一部) 川原町地区 (一部) 旧城下町地区 (一部) その他の地区	2,024.8ha	景観計画重要区域「金華山・長良川区域」に一部設定済み。 他の部分は今後設定を検討。
合 計			2,356.7ha	

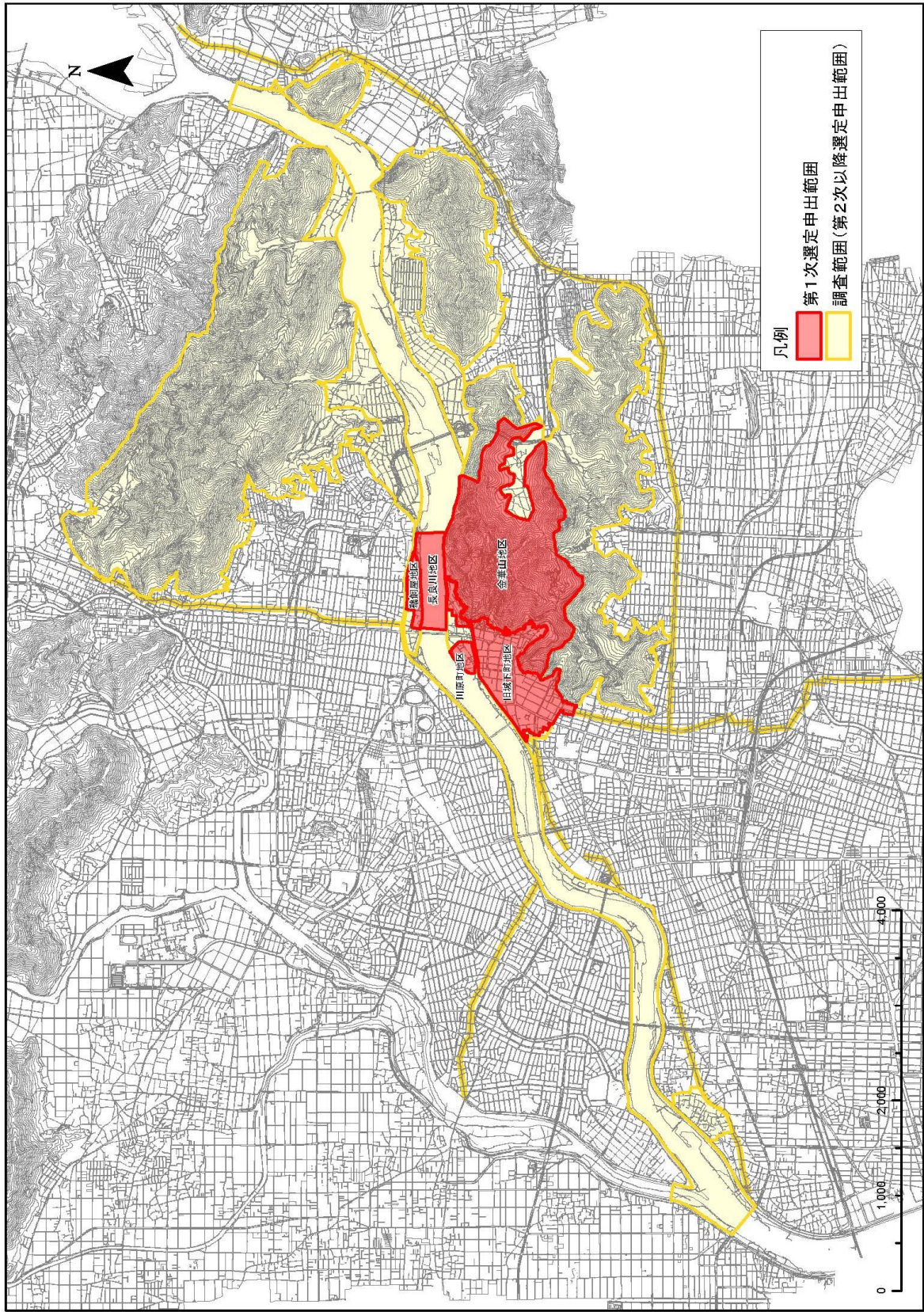


図 2-10 重要文化的景観選定申出の進め方

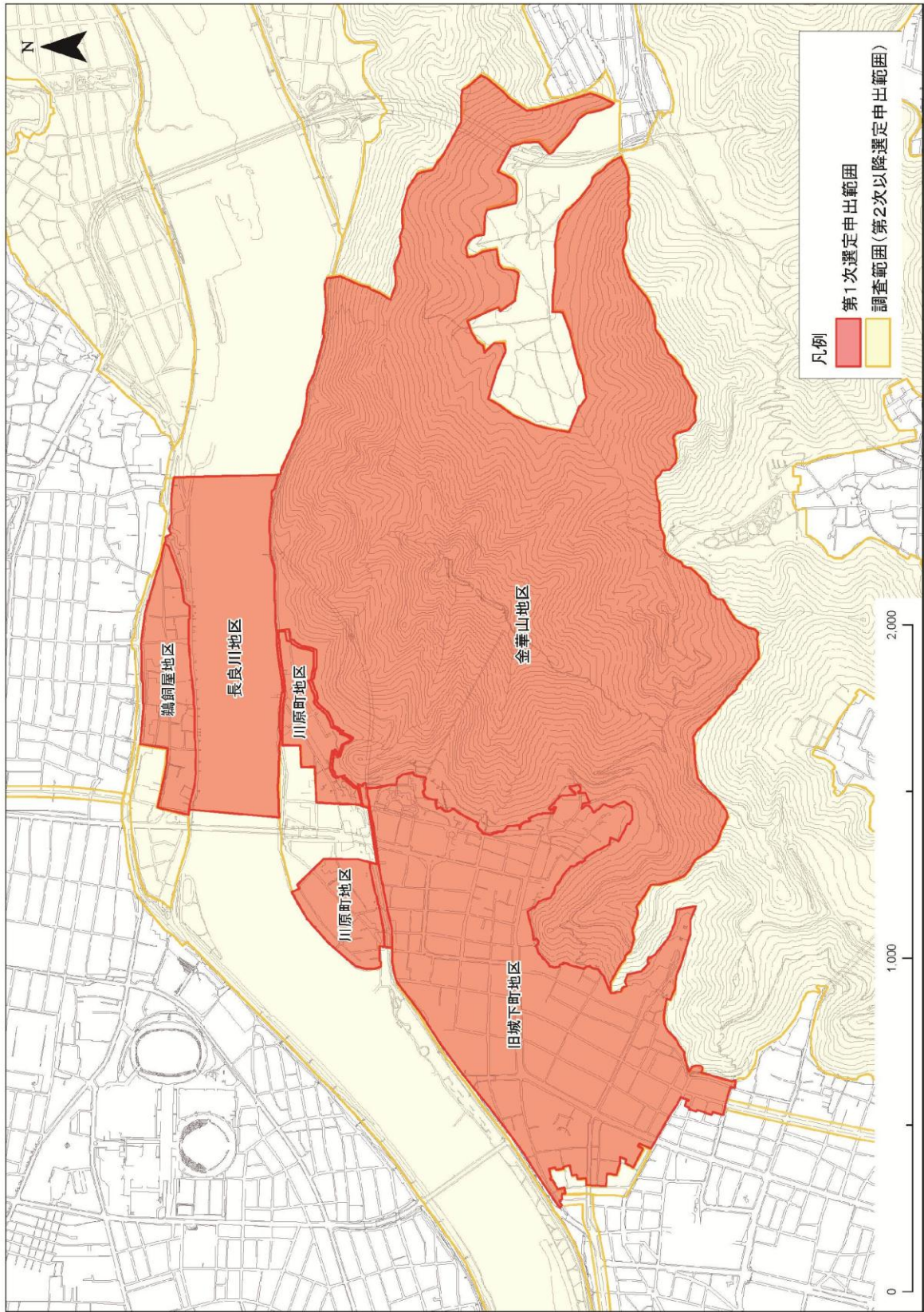


图 2-11 重要文化的景觀一次申出範圍

2-5 地区の概要

第1次選定申出範囲を構成する5つの地区について、その概要を以下に示す。

(1) 長良川地区 (写真 2-1)

長良川では古代より水運が行われ、近代まで流通・往来の主軸として機能した。申出範囲内にかつて存在した中河原湊(川原町地区)・長良湊(鶺鴒屋地区)は京街道・高富街道・郡上街道岐阜街道などが繋がることで水運と陸運の結節点となったため、経済活動の拠点となった。また長良川には多くの渡船場が設置されたが、近代以降、川湊は徐々に廃れ、渡しの多くは橋梁へと変化したものの、現在も唯一残る小紅の渡しは、一般県道文殊茶屋新田線の一部であり、近接する乙津寺の縁日の参拝者等に多いに利用されている。

また、長良川は鶺鴒をはじめとする漁業の漁場であり、その豊富な資源は地域の食文化を形成してきた。鶺鴒は御料鶺鴒、観光鶺鴒が行われ、流路は漁場として、河川敷はまわし場として利用される(写真 2-2)。また、川岸には、観光鶺鴒により発展した旅館や料亭などが建ち並ぶ。

さらに、長良川は水浴場として多くの市民が親しんできた歴史を持ち、夏には涼を求めて川遊びをする人々の姿が見られる。



写真 2-1 長良橋から上流への眺望



写真 2-2 鶺鴒漁(総がらみ)

(2) 金華山地区

美濃山地の南西端、濃尾平野との境に位置する金華山は、その険峻な山容を平野部に突出し、長良川とともに岐阜市のランドマークとして多くの市民に認識されている(写真 2-3)。

金華山は、古代以来の信仰の対象であるとともに、戦国時代には、天嶮の要害として美濃国の領主であった斎藤道三や織田信長等により、山頂には城、山麓には居館が置かれた。関ヶ原の合戦の前哨戦により、岐阜城が落城した後、近世以降は尾張藩により管理され、一般の入山が制限された。近代以降も御料林(戦後は国有林)として今日まで保護されてきたため、現況植生は地域の自然植生に近い貴重な植物群落である。また、明治初期には岐阜公園が開設され、明治末期には岐阜城復興天守(写真 2-4)、大正時代には三重塔が造られたことにより、現代においても自

然と歴史を一体的に体感できる憩いの空間と認識し利用されている。

金華山は、仰ぎ見る山として、古来より和歌や俳句に詠まれてきた。また、近世から今日に至るまで、金華山は、鵜飼の舞台の借景地として絵画や絵はがきの題材となってきた（写真 2-5、2-6）。さらに、長良川とともに、市内の多くの小中学校の校歌に登場する。昭和初期には長良川とともに風致地区に指定され、景観の保全が図られてきたこともその一助となったと考えられる。



写真 2-3 長良橋からの眺望



写真 2-4 岐阜城復興天守



写真 2-5 鵜飼の背景に描かれた金華山
（「長良川鵜飼図」岐阜市歴史博物館所蔵）



写真 2-6 絵はがきの題材となった鵜飼漁と
金華山（岐阜市歴史博物館所蔵）

（3）鵜飼屋地区

川原町地区と同様に堤外地に位置する（写真 2-7）。近代までは高富街道の渡河点や長良湊が置かれた陸上交通・長良川水運の結節点であった。地区の西部を南北に通る高富街道沿いには、町家形式の伝統的家屋が多く残存している。

本地区は、中世末期から長良鵜飼の拠点となり、現在も6名の鵜匠が住み、生業としての漁を営んでいる。地区内には、鵜匠をはじめ、地区の住民が長良川へアクセスするための細い道路が多く現存し（写真 2-8）、長良川を生活の一部とする暮らしが継承されている。また、近世以降に盛行した観覧鵜飼により、地区内の川岸には多くの旅館や料亭が建設され、現代においてその形を変えながらも、機能や位置を継承している。

長良川との距離が近いことから、地区内には、洪水の被害を軽減するための「陸閘」という特有の水防構造が多く見られる。また川岸には、旅館や住宅の土台として築かれた人頭大以上の川原石を用いた石垣が、地区独特の景観を形成している（写真 2-9）。

また平成 24 年 8 月には、鶺鴒の伝統や魅力をより多くの人々に発信するための施設である「長良川うかいミュージアム（長良川鶺鴒伝承館）」が開館した。子供から大人まで楽しむことができる「体感・体験型」の展示や、本物のウミウを観察できる生態展示などがある。建物の外観は壁の色調や高さを抑えており、夜間行われる鶺鴒漁の妨げにならないような工夫が施されている（写真 2-10）。



写真 2-7 鶺鴒屋地区遠景



写真 2-8 川に繋がる細い道



写真 2-9 川岸の石垣



写真 2-10 長良川うかいミュージアム外観

（４）川原町地区

旧城下町地区と堤防を隔てた扇状地谷口の堤外地に位置する。水運の難所であった長良川扇状地において比較的流路が安定した扇頂部には中河原湊が、下流の扇端部には鏡島湊が置かれた。両湊は、その間において長良川が少なくとも 3 本に分流していたことから、長良川水運を掌握する上での重要な湊地であった。

中河原湊には、近世に尾張藩の川役所が置かれ、対岸の鵜飼屋に居住する鵜匠に抜け荷の取締りを行わせるなどして、長良川上流からの流通を掌握した。また、中河原湊は、北方の山県郡や越前国を繋ぐ高富街道の渡河点でもあり、飛騨や美濃北方からの流通・往来の窓口となった。織田信長の時代に、本地区の舟木座に特権が認められたこと、または上流で製造される美濃和紙が入手しやすいという地理的な利点などから、近世・近代を通じ、本地区には材木や和紙を扱う問屋業を生業とする人々が多く居住し、現在も往時の繁栄を伝える伝統的家屋の町並みが継承されている（写真 2-11～2-13）。明治末期に金華山山頂に岐阜城復興天守が建設されると、人々は家屋内において、金華山もしくは岐阜城復興天守が見える位置に本座敷や茶室を置くようになる。

本地区は、堤外地という立地条件から鵜飼屋地区との共通点が多い。地区内には細い道があり（写真 2-14）、また伝統的家屋の敷地の奥に設けられる土蔵の土台には川原石による石垣が築かれ、さらに川岸には観覧鵜飼により発展した旅館が建ち並ぶ。また本地区の東部には、鵜飼に関連した施設として、鵜飼観覧船を製造・修理するための造船所が存在する。



写真 2-11 川原町通りの町並み



写真 2-12 土蔵の土台の石垣



写真 2-13 紙問屋業を支えた伝統的家屋



写真 2-14 地区内の細い道

(5) 旧城下町地区

中世末期、斎藤道三や織田信長により、本地区は領国経営の拠点となった。城下町内において道路網、武家地、寺社地、町人地等が計画的に配置され、それらを堀と土塁で囲むという、総構えによる原初的な都市構造は、現代においても色濃く継承されている（写真 2-15、2-16）。

近世に至り、岐阜城が落城した後、本地区は商業都市「岐阜町」へと変貌し、発展し続けた。岐阜は、材木や竹、美濃和紙等が産出される美濃山地に近いという地理的な利点から、岐阜町には、材木・和紙・糸等をはじめ様々なものを扱う問屋業、竹および和紙を利用する提灯・団扇・傘等の伝統産業が発達し、現在も紙問屋や団扇製造などの生業が継承されている。

問屋業や伝統産業を支えた伝統的家屋について、主屋は道路に接し、「うなぎの寝床」状の敷地の奥には土蔵を配置するのが一般的であり、地区内には現在も多くの家屋が残されている。そのほとんどが通りに面する部分に格子を設置するが、人々は年に数回、格子などの木部を水もしくはお湯で丁寧に洗う。そのため、白木の格子が連続すること町並みは、岐阜の景観の大きな特徴である（写真 2-17、2-18）。



写真 2-15 旧城下町地区遠景



写真 2-16 旧百曲通の町並み



写真 2-17 久屋町の町並み



写真 2-18 家屋の木部の洗い

第3章 文化的景観の保存に関する基本方針

重要文化的景観の選定申出にあたり、図3-1に示すとおり保存管理、整備・活用、運営体制の基本方針を定める。また第4、6、7章において、それぞれの事項について詳述する。

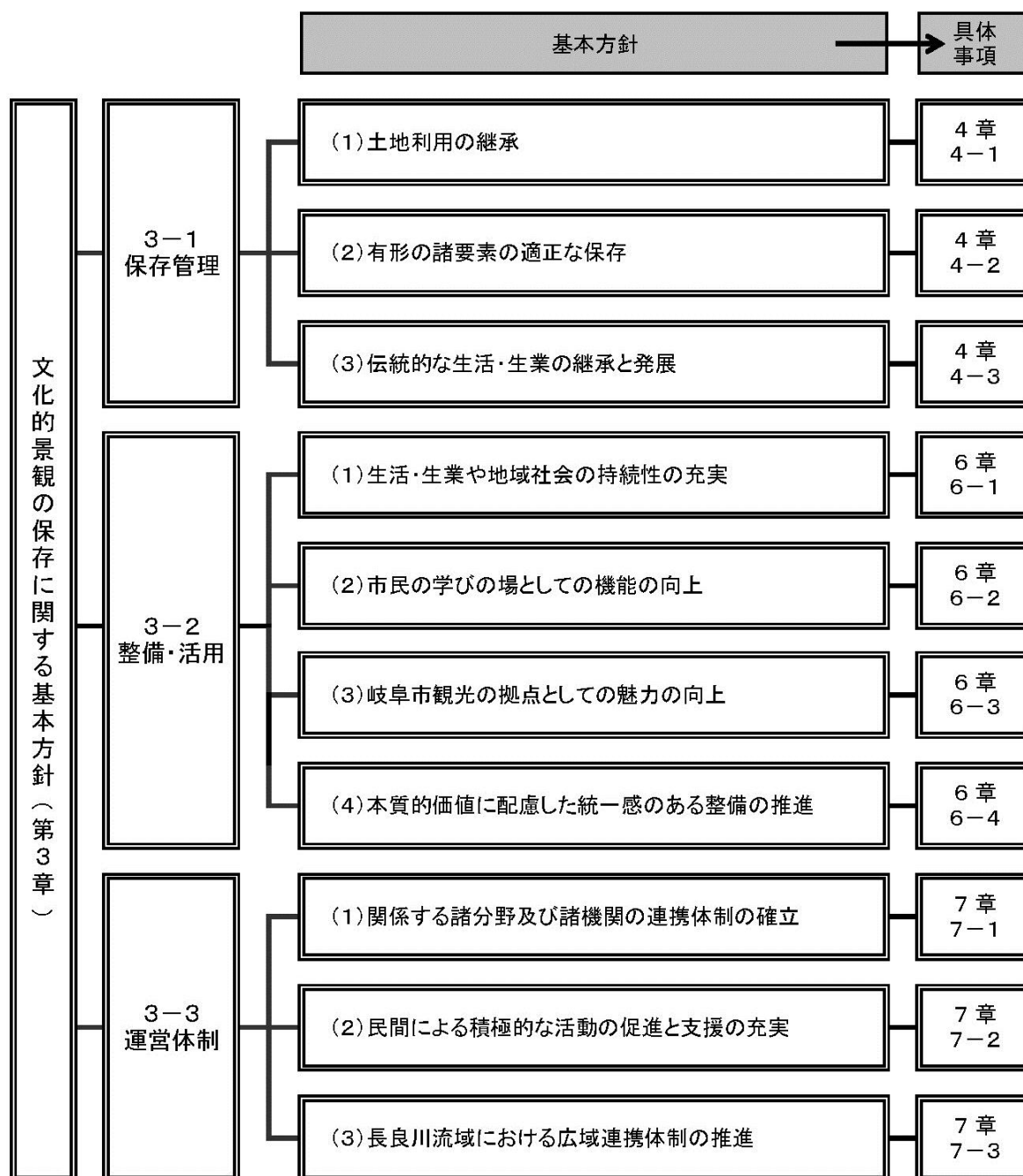


図3-1 文化的景観の保存に関する基本方針の体系

3-1 保存管理に関する基本方針

文化的景観における流域固有の自然と重層する歴史により形成された土地利用と建造物をはじめとする有形の諸要素、また土地に継承された伝統的な生活・生業（無形の諸要素）に対して、それぞれ以下に示す（1）～（3）を保存管理の基本的な方針とする。

（1）流域固有の自然と重層する歴史により形成された土地利用の継承を図る。

当文化的景観には、長良川流域固有の良好な自然環境と舟運を基軸として形成された流通・往来の構造、中世末から近世を起源とする重層的な歴史により形成された市街地等、文化的景観の構造に基づく土地利用が継承されている。

具体的には、水運や鵜飼の歴史と伝統を継承する長良川地区、戦国時代の岐阜城築城や近世の入山規制という歴史を有し、その後国有林として管理されていることにより良好な自然を継承する金華山地区、また戦国時代の岐阜城下町の構造を基盤とし、商業地として発展してきた川原町地区と旧城下町地区の市街地、さらに鵜飼の歴史や伝統を継承する鵜飼屋における堤外地の市街地としての土地利用が挙げられる。

これらの土地利用は、文化的景観の基盤を形成するものであり、社会状況が大きく変化した今日においても、岐阜市固有の自然や歴史を表徴する空間として市民のアイデンティティの形成に深く関わり続けている。今後は、時代に即した変化に対応しながらも、文化的景観の価値に配慮しつつ、長良川と金華山の良好な自然環境と、金華山における城郭及び岐阜城下町の道路網等の歴史的構造を有する市街地を一体的な土地利用とし、その持続に努める。

（2）流域固有の自然と重層する歴史を物語る有形の諸要素の適正な保存を図る。

当文化的景観には、流域固有の自然と重層する歴史を物語る土地利用とともに、それを規定し特徴付ける有形の諸要素が多く継承され、具体的には、流通・往来の構造や中世から近世を起源とする都市の骨格として、堤防・道路・水路・街区や敷地等の諸要素が継承されるとともに、歴史の重層性を物語る伝統的家屋や土木構造物、樹木等をはじめとする諸要素が多様に現存する。

これらの諸要素は、文化的景観に継承される流域固有の自然と重層的な歴史について市民や観光客の理解を促すことのできる具体の手がかりであるため、観光事業やまちづくり活動等において積極的に活用するとともに、修復等の必要な措置を図りながら保存に努める。

（3）文化的景観において営まれる伝統的な生活・生業の継承と発展に努める。

当文化的景観には、長良川鵜飼をはじめとする多様な漁撈や、材木商や紙問屋をはじめとした問屋業、美濃和紙を用いた岐阜提灯・岐阜団扇等の流域の特産物を活かして都市で育まれた製造業等、地域固有の伝統的な生活・生業が継承されている。さらに旧城下町地区には、両側町の形態が維持され、遅くとも近世までには形成されたと考えられる自治組織が現在も継承されている。これら伝統的な生活・生業は、当文化的景観の価値を構成する無形の諸要素に該当するものであるものの、高度経済成長期以降の社会構造の変化を経て、その永続的な継承が危ぶまれるものも多いため、関係諸団体と連携して、伝統的な技術の継承を支援するとともに、時代に対応した発展に努める。また、旧城下町地区にみられる町を単位とした伝統的な自治組織についても、その継承と時代に即した発展に努める。

3-2 整備・活用に関する基本方針

文化的景観の整備・活用は、生活・生業や地域社会の持続性を継承するための側面、岐阜市民の「心のふるさと」としての側面、岐阜市観光の拠点としての側面を重視することから、その整備にあたっては、文化的景観の価値や構造に即した統一感あるデザインへの配慮を図ることとし、以下に示す(1)～(4)を基本的な方針とする。

(1) 生活・生業や地域社会の持続性の充実を図る。

当文化的景観は、長良川流域を生活・生業を営む市民により形成された。しかしながら、昨今の社会情勢の変化に伴い、問屋業、伝統産業、また長良川における漁撈等の生業が衰微するとともに、城下町以来の居住空間である金華地区周辺の市街地では、高齢化が進み、町を単位とした伝統的な地域社会としての活動に支障を来す状況になりつつある。そのような状況の中で、地域特有の歴史資産等を核としたまちづくり会が設立されるなど、新たなコミュニティーが形成されつつある。岐阜市は、時代に応じた生業や地域社会の持続性を高めるための必要な社会基盤等の整備を積極的に図るとともに、文化的景観の魅力を高める住民によるまちづくり等の活動を積極的に支援する。

(2) 市民の学びの場としての機能の向上を図る。

当文化的景観は、岐阜市固有の自然、歴史、文化が表徴する場所として、多くの市民に意識されている。岐阜市は、地域住民や市民が自治会の活動やまちづくり会の活動を運営、または参加することを通してその価値を理解し、さらに地域の魅力を再発見し、今後もそれらを継承することが可能となることを目指し、文化的景観を「市民の学びの場」として位置付け、各団体の活動の核となるような歴史的・文化的資産、岐阜公園をはじめとする文化施設等の整備等による充実を積極的に図る。

(3) 岐阜市観光の拠点としての魅力の向上を図る。

当文化的景観は、岐阜県及び岐阜市の観光拠点のひとつであり、特に近代以降、長良川における鶺鴒観覧と金華山・岐阜公園を中心とする歴史散策は、岐阜市の観光の主眼として全国的な知名度も高い。岐阜市は今後もこれらの区域における観光地としての継承を目指すものである。昨今の社会情勢に伴う観光スタイルの変化により、旧来の観光地における集客状況が全体的に低下し、観光産業をはじめとする地域経済に影響を与えている状況の中、観光地としての魅力とそこに生まれる産業を次世代に継承するため、開発や社会状況の変化等により魅力を喪失しないよう十分に配慮するとともに、岐阜市固有の魅力をより分りやすく、触れやすいものとして、来訪者に提供するために必要な整備や活用を図ることとする。

(4) 文化的景観の本質的価値に配慮した統一感のある整備の推進を図る。

当文化的景観において、その活用のために行われる上記の(1)～(3)の側面をはじめとした様々な整備事業にあたっては、文化的景観の自然的特性、歴史的重層性、社会的継続性から成る構造を十分に認識した上で、その本質的価値を損なわないことが原則である。

個々の整備について文化的景観の本質的価値を損なわないよう、その規模やデザイン等に配慮するとともに、文化的景観としての統一感を保つよう各事業の相互の連携を強化し、十分な検討を図る。

3-3 運営体制に関する基本方針

文化的景観の保存に関する運営体制は、積極的に岐阜市が事業を進めるとともに、市民を運営の主体として行政がそれを支援する体制の確立を目指すものである。さらに、長良川の環境保全をはじめとする広域の連携体制の必要性にも留意し、以下に示す(1)～(3)を基本的な方針とする。

(1) 文化的景観に係る諸分野及び諸機関の連携体制を確立する。

岐阜市は、これまでも当文化的景観の自然・歴史・文化に渡る諸分野に対する様々な施策を展開してきた。今後とも、個別施策の充実を図りながら、相互の連携を強化し、地域の持続的な発展に対して、その効果を十分に発揮させる必要がある。

そのため、文化的景観の価値を適正に保存し、良好な状態で次世代に継承することを共通理念とし、その価値を高め、全国に誇る観光資産として積極的に活用しながら地域の持続的な発展を促す。また、市民生活や生業の継承と発展に対して、行政が総体としてサポートできるよう、文化財保護やまちづくり、産業振興や観光等の諸分野が十分な連携を図ることができる庁内体制の確立を目指す。また、岐阜市庁内のみならず、国・県をはじめとする庁外の関連諸機関との連携の強化を図るとともに、専門家や住民・NPO・企業等の民間を交えた運営体制を確立する。

(2) 市民をはじめとする民間による積極的な活動の促進と支援の充実を図る。

文化的景観は、範囲内住民だけでなく全ての市民の宝である。市民自らがふるさとの景観の価値に誇りを感じ、次世代へ継承するために考え行動することは、文化的景観を保護する重要な手段である。そのため、行政には、市民自らが行う文化的景観の価値を学ぶための活動、また文化的景観を構成する諸要素を保存・活用する積極的な活動を推進し支援することが望まれる。

文化的景観の範囲内では、環境保全や地域の文化資産を普及啓発など、住民、建造物等の所有者、まちづくり会、NPO、企業等による積極的な活動がすでに行われている。今後もそのような活動が継続することや、活動主体者への支援制度の充実は重要であり、市民と行政の積極的な協働体制を構築する。

(3) 自然と文化を継承するための長良川流域における広域連携の体制整備を推進する。

長良川は、岐阜市の誇る当文化的景観の自然・歴史・文化的側面における価値の基幹を成す重要な河川である。その水質や水量の保全、アユに代表される多様な漁業資源の保護等は、市町村単位による取り組みの他、上流から下流に及ぶ流域圏において一貫して取り組むべき課題である。また、長良川流域には、本文化的景観以外にも、「長良川流域文化」とも呼べる流域固有の歴史や文化を継承する多くの文化資産があり、それらを関連付けた魅力の創出等も検討されるべきである。そのため、岐阜市は流域の市町村との連携を図り、広域かつ長期的な取り組みを行うこととする。